

ロバート・グローステストの光概念に関する諸問題V 研究ノート

ロバート・グローステスト『分析論後書注解』第一巻第十四章
216 行～ 290 行の翻訳と覚え書き

高岡 尚

この翻訳の底本は、ROBERT GROSSETESTE, *COMMENTARIUS IN POSTERIORUM ANALYTICORUM LIBROS*, edit, Pietro Rossi. UNIONE ACCADEMICA NAZIONALE CORPUS PHILOSOPHORUM MEDII AEVI TESTI E STUDI II, FIRENZE LEO S. OLSCHKI EDITORE 1981. I, 14 の 216 行から 290 行である。

凡例

- 本文の左端および訳者覚え書き中に付した「行の番号」は、底本 OLSCHKI 版に付された行番号である。
- 訳者覚え書き中の《 》は原典からの引用文あるいは語句を示す。
- 本文訳文中および訳者覚え書き訳文中の括弧「 」『 』「〈 〉」は、中の字句ないし文章を明確に示す。
- 本文訳文中の括弧（ ）は訳者による意味の補いを示す。
- 原典の引用文《 》中の { } は訳者による訳語あるいは補いを示す。
- 本文訳文中の文字右肩の括弧^()は訳者覚え書き番号を示す。
- 本文訳文および訳者覚え書き中のアンダーラインは特に重要な語句を示す。

翻 訳

グローステスト『分析論後書注解』⁽¹⁾ I, 14, 216 行～290 行

216 しかし私は言う。いかなる知識 *scientia* も感覚の補助 *sensus adminiculum* なしに存在することが可能である⁽²⁾。

217 理由 (1)⁽³⁾ 神的精霊の中には、すべての知識 *scientia* が永遠から存在し、しかも、その中には普遍的なモノども *universalia* の確実な認識が存在するだけでなく、すべての個別的なモノども *singularia* の確実な認識も存在する——ただし、神的精霊は、すべての個別の本質 *omnes singulares essentiae* を切り離された仕方を知っているがゆえに、個別的なモノども *singularia* を普遍的な仕方を知っている、という意味であるのだが——。

理由 (2) われわれは「この人間性の個別性」をもろもろの付帯性 *accidentia* に混ぜることによってのみ、それを知っているが、しかし、神的精霊は、「この人間性の個別性」をもろもろの付帯性 *accidentia* と一緒にしながら区分するのではなく、「この人間性」の本質の純粋性 *puritas essentiae* においてその個別性を知っている。

224 理由 (3) 同様に、知性実体たち *intelligentiae* は、第一の光⁽⁴⁾ からの放射 *irradiatio a lumine primo* を受け入れながら、第一の光自体の中に「普遍的で個別的なすべての知られうるモノども」を見る⁽⁵⁾。

225 また、知性実体自身がなす自らへのふり返りの中にも *in reflexione ipsius intelligentiae supra se*、知性実体は、自らの後に存在するモノども自体を、自ら（知性実体）がそれらの原因であるがゆえに認識する。それゆえ、感覚を欠いているモノども（神的精霊と知性実体たち）の中には「最十全的知識」*scientia completissima* が存在する。

理由 (4) また、同様に、人間的霊魂 *anima humana* の最高位の部分は——「知性的部分」*pars intellectiva* と呼ばれ、身体の或る部分の現実活動でもなく、また、「自らの固有の働きにおいて身体的道具を

必要とするもの」でもないところのものは——、もし墮落した身体の荷駄によって朦朧となったり重苦しくなったりしていなければ、より上位の光から受け取った放射を介して *per irradiationem acceptam a lumine superiori*、感覚の補助 *sensus adminiculum* なしに「十全的知識」 *completa scientia* を所有するはずである。これは、靈魂がやがて身体から引き離されてしまうであろうとき、あのもの（靈魂の最高位の部分）が「十全的知識」 *completa scientia* を所有することになるのと似ており、また、物的モノどもへの愛着と幻想から徹底的に離脱している

235 或る人たちが「十全的知識」 *completa scientia* を恐らく所有することになるのと似ている。

しかし、靈魂の眼の純粹さは墮落した身体によって朦朧となり重苦しくなっているがゆえに、生れて来た人間の中の理性的靈魂そのもののすべての力 *omnes vires ipsius animae rationalis in homine nato* は、身体の荷駄に支配されて、働くことができなくなり、その結果、ある仕方では眠って働くことになる。このようなわけで、時の経過によって感覚 *sensus* が、感覚と可感的なものども *sensibilia* との数多くの出会いによって働くとき、理性は、目覚めて諸感覚自体に混ぜ合わされ、諸感覚の中で、あたかも船に乘せられているようにして可感的なものどもへと運ばれる。

しかし、目覚めた理性 *ratio expergefata* は、感覚の中で渾然一体となっていたものどもを分割し *dividere*、離れ離れに注視しはじめる。例えば、視覚は色、大きさ、形、物体を渾然一体としており、視覚の判断の中では、これらすべてが一なるものとして受け容れられている。が、しかし、理性は、目覚めると色を大きさから、形を物体から、さらにまた、形と大きさを物体の実体 *corporis substantia* から分割する。このようにして理性は、分割と分離によって *per divisionem et abstractionem*、「大きさと形と色を運んでいる物体の実体」の認識へと到達する。しかしながら、理性が、「このことが現実に普遍的である」と知るのは、理性が多数の個別的なモノどもからこの分離を行ない、多数の個別的なモノどもの中で見いだされる理性自らの判断に従って

secundum iudicium suum in multis singularibus repertum 「一にして
 同なるもの」 unum et idem が理性の面前に現われた後になって初め
 てなのである。

それゆえ、これこそが、理性が非複合的普遍 universale incomplexum
 を感覚の補助によって個別的なモノどもから狩りする venari
 universale incomplexum a singularibus per susus adminiculum とき
 にたどる道なのである。なぜなら、(非複合的普遍を狩りするさいの糸口となる)
 経験的複合的普遍 universale complexum experimentale が、浄化さ
 253 れていない精神の眼を所有する私たちによって獲得されるのは、感覚
 の奉仕なしにはありえないからである⁽⁶⁾。

254 理由⁽⁷⁾ 感覚が二つの可感的なものどもを、——すなわち、一方(甲)
 が他方(乙)に対して原因であるような二つのものを、あるいは、一
 方(甲)が他の仕方で他方(乙)に対して比較されるが、媒介的比較
 自体を感覚が捕えないような二つのものを——数回捕えるとき、例え
 256 ば、だれかが「スカモニア(小アジア産のヒルガオ科の植物)の根を食べる
 こと」と「それに伴う赤色コレラを運び出すこと」をたびたび見るが⁽⁸⁾、
 258 「スカモニアの根が赤色コレラをおびき出して排泄すること」に気
 がつかないとき、その人は、これら二つの可視的なモノどもを頻繁
 に見ることによって ex frequenti visione horum duorum visibilium、
 第三の不可視的なモノを評定しはじめる incipere estimare tertium
 invisibile、すなわち、「スカモニアが赤色コレラの排泄の原因である
 こと」を評定しはじめる。次に、「頻繁に評定されて記憶の中に貯え
 られたこの表示意図」と「評定された表示意図が受け取られる源であ
 る感覚認識された表示意図ども」によって理性が眼覚まされる。この
 目覚めた理性は驚嘆し、事実 res が「この記憶されている評定」が示
 す通りであるかいなかを熟考し始める。

そして、これらの二つが理性を実験 experientia へと向かわせる。す
 なわち、理性は、「赤色コレラをきれいに流す他の諸原因の制限と除去」
 を伴ってスカモニアを食べるように仕向ける。しかるに、理性が「赤
 色コレラを排泄する他の諸原因の確実な制限と除去」を伴って頻繁に

スカモニアを与えたときには、理性のもとでは「すべてのスカモニアが自体的に赤色コレラを排泄する」*omnem scamnoneam educere secundum se choleram rubeam* という「この（可感的にして）普遍的なもの」*hoc universale* が形成される。これこそが、感覚から「経験
271 的普遍的原理」へと至る道 *via qua pervenitur a sensu in principium universale experimentale* である。（以上理由）

272 こうして明らかになったことは、墮落した身体の荷駄に囚われた精神の眼を所有する私たちの中では、（神的精神と知性実体たちの場合とは違い）もし何かの感覚が欠けるならば、欠けている感覚の個別的なものどもから狩りされる非複合的普遍 *universale incomplexum* もまた欠けるであろうし、またそれら同じ個別的なものどもから取られる経験的複合的普遍 *universale complexum experimentale* もまた欠けるであろうし、またその帰結として、このようにして狩りされる普遍ど
278 も *universalia* の上に立てられるすべての論証と知識 *demonstratio et scientia* も欠けるであろう⁽⁹⁾。ということである。

279 理由。私たちの中で眠っている理性は、自らが混ぜ込まれている相手である感覚の働きによって目覚まされるまでは働かない。しかるに、靈魂の視覚 *visus animae* が墮落した身体の荷駄によって朦朧となる原因は、靈魂の「情動と視力」*affectus et aspectus animae* が分割されておらず、靈魂の視力 *aspectus animae* は、靈魂の「情動ないし愛」*affectus sive amor animae* が到達するところまでしか到達しないということにある。それゆえ、靈魂の「愛と情動」*amor et affectus animae* が身体へと、また、身体的なもろもろの誘惑へと向くとき、必然的に「愛と情動」は自分といっしょに靈魂の視力を引き込み、靈
283 魂の視力を自分に固有な光 *lumen suum* からそらす⁽¹⁰⁾。この光が靈魂の視力に関わる仕方は、太陽が外的な目に関わる仕方と同様である。

284 それゆえ、自分に固有な光からそれている精神の視力 *aspectus mentis a suo lumine aversus* は、必然的に闇と無為 *tenebrae et otium* へと向かうが、それは、精神の視力が或る仕方で外的諸感覚を介して（闇と無為から）ぬけ出して、外的可感的光の中で或る仕方によっ

- て、自分に生まれつきの光の跡 *vestigium lucis ad ipsum natae* を再び見いだすまで続く。そしてそれに遭遇すると、いわば刺激されて、自らに固有な光 *lumen proprium* を探しはじめる。そして、愛が可滅的物的ものども *corporalia corruptibilia* からそれればそれるほど、
- 290 それほど精神の視覚は自らの光 *lumen suum* へと向き直り、かつ、それほど自らの光を見いだす⁽¹¹⁾。以上、翻訳

訳者覚え書き

(1) ロバート・グローステスト (1168 – 1253) 『分析論後書注解』について

本書はアリストテレス『分析論後書』の注解の形式を取っている。しかし内容は、注解者が自己の思想の新たな展開を自由に試みる実験工房となっている。『分析論後書注解』は、アウグスティヌスと新プラトン主義の伝統を引き継ぐ西方キリスト教世界の「存在と認識の神学」の中にアリストテレスの「自然学的認識理論」を積極的に組み込みながら、物的存在と人間の感覚的認識とにキリスト教神学の中心的要素の一つとしての評価を与えようとする体系的思索である。執筆年代は1220年～1228年頃とされている (James McEvoy, *The Philosophy of Robert Grosseteste*, CLARENDON PRESS・OXFORD, 1982, p.232. その他)。

なお、本翻訳の対象『分析論後書注解』 I. 14. 216行 – 290行 (以下、本章とする) の中に訳者は、アリストテレスの『分析論後書』と『動物発生論』、アウグスティヌスの『創世記注解』と『三位一体』、ディオニュシオス・アレオパギテスの『天上位階論』、そして『原因論』、さらにはプリニウスの『博物誌』、アヴィケンナの『医学典範』、および、医療に関するガレノスによるいくつかの言及、などの痕跡を見いだすことができたと感じている。以下、該当する個所において個々に指摘する。

覚え書きに使用した文献一覧

アリストテレス

『分析論後書』加藤信朗訳、岩波書店、アリストテレス全集 1, 1971 年

『動物発生論』島崎三郎訳、岩波書店、アリストテレス全集 9, 1969 年

アウグスティヌス

『創世記注解』片柳栄一訳、教文館、アウグスティヌス著作集 16, 1994 年

『三位一体』泉治典訳、教文館、アウグスティヌス著作集 28, 2004 年

ディオニュシオス・アレオパギテス

『天上位階論』今義博訳、平凡社、中世思想原典集成 3, 1994 年
著者不詳

『原因論』V. M. ブリオット、大鹿一正訳、聖トマス学院、中世哲学叢書 II, 1967 年

小プリニウス

『博物誌』

Naturalis Historia, Rec. D. Detlefsen, Georg Olms Hildesheim, 1992.

アヴィケンナ

『医学典範』

Avicennae *LIBER CANONIS MEDICINAE*, cum castigationibus Anddreae Bellunensis, translatus a magistro Gerardo Cremonensi in Toletto ab arabico in Latinum. Cum admissione Clementis Papae VII sub anno 1524.

ガレノス

『全著作集』

Claudii Galeni *OPERA OMNIA I-XX*, Georg Olms Hildesheim. 1964-1965. Reprografischer Nachdruck der Ausgabe, Leipzig 1821.

(2) 216 行《しかし私は言う。いかなる知識も感覚の補助なしに存在することが可能である。Dico tamen quod possibile est quamlibet scientiam esse absque sensus adminiculo.》

この個所は、アリストテレス『分析論後書』の

《第一格が事物の知識をもつための最も決定的な推論形式であることは明白である》第一卷第十四章, 79a31.

《(その第一格推論形式の原理である) 普遍 (すなわち技術や知識の端初) は感覚からわれわれに生じて来る》第二卷第十九章, 100a9.

《感覚をもたなければ、ひとは帰納によって [全体的なものに] 導かれることは不可能であるとすれば (何となれば、個々のものを知るものは感覚であるから)。……すなわち、[感覚がなければ] これら個々のものについての [科学的な] 知識を得ることはできない。》第一卷第十八章, 81b1 – 9.

などを念頭に置いて書かれている。

であるからこの個所は、後続する本章全体が、アウグスティヌス主義と新プラトン主義的キリスト教神学の立場で書かれた、アリストテレス的認識の理論を否定する文章であるかのごとき印象をわれわれに与える。

しかし、本章は、十二世紀西欧世界への新プラトン思想流入の大動脈でありながらしかもアリストテレスの教説として広く受け入れられていた *LIBER DE CAUSIS* 『原因論』(「新プラトン主義文書『原因論』の形而上学研究 1.」岡崎文明. 金沢大学教育学部教科教育研究、第 28 号、252-3 頁、平成 4 年) に沿うところが大きいと推測される。したがって本章の解釈はこの点を視野に入れて進められなければならない。

またそのほか、アウグスティヌスの『創世記注解』と『三位一体』そして、ディオニュシオス・アレオパギテスの『天上位階論』、これらの「存在と認識の神学」も本章を支える重要な要素であると思われる。全体として本章は、アリストテレスの認識理論に対立しているのでは

なく、いわば、「新プラトンのアリストテレス自然学」を吸収して「存在と認識のキリスト教神学」に新たな深まりを与えようとしているのである。

(3) 217 行－235 行《理由 1. 理由 2. 理由 3》

特にこの個所には、イ. アウグスティヌスの『創世記注解』と『三位一体』、ロ. ディオニュシオス・アレオパギテスの『天上位階論』、ハ. 『原因論』などこれらの存在と認識の理論との共通点が色濃くみとめられる。

イ. アウグスティヌス

1. 神の言葉による天使の創造

《(「光あれ」と語る神の声について、) 何と云うべきであろうか。それ自身は物的音聲ではないもの、それが適切にも神の声であると解釈されるのであろうか。そしてこれが「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」(ヨハ一・一)と言われている神の言葉の本性に属するものであろうか。というのも神の言葉について「万物は、これによって成った」(同一・三)といわれているのであるから、光も、神によって「光あれ」といわれた時、この言葉によって創られたものであることは明瞭なのであるから。もしそうであるなら、神が「光あれ」といわれたのは、永遠的なことになる。なぜなら神の言葉、神のもととなる神、神の独り子は、父と共に永遠なのであるから。》『創世記注解』、第一卷第二章。

《また創られた光とは……「光あれ」との言葉によって完成された第一の被造物であると言えよう。この被造物は「初めに、神は天地を創造された」といわれた時、まず天と呼ばれたものであり、「神は『光あれ』といわれた。こうして、光があった」との言葉は、創造者がこの光を自らのもとへと呼び出し、この光が創造者へ身に向け、照らし出されたことと解される》同上書、

第一卷第三章, 7.

《御子なる言葉は無形相な生をもってはいない。御子にとっては存在することと生きることとは同じであるばかりでなく、生きすることは、英知的に生き、至福に生きることと同じなのである。これに対し被造物は、たとえかの御言葉により近いと思われる霊的、知的、理性的な被造物であっても、無形相的な生を持つ可能性がある。というのもこの被造物にとって、存在することは生きることと同じであるにしても、生きることと英知的に至福に生きることとは同じでないからである。不変の知恵から離反し、愚かに悲惨に生きるとすれば、それが無形相性なのである。そうではなく神の御言葉である知恵の不変の光に身を向けるなら、形成されるのである。被造物はこの神より存在を受け、いかなる仕方でも存在し生きるのであるが、この同じ神に身を向けることによって、英知的に至福に生きるのである。知的な被造物の原理は、永遠の知恵である。そしてこの知恵は自らのうちに不変に留まりつつ、ひそかに霊的に呼びかけることを通して、この知恵を原理とする被造物に語りかけることを決してやめたまわない。こうしてこの被造物は、自らがその存在を負っているものに身を向けるのであり、このように身を向けることがないなら、形成され、完成されることはないのである。だからこそ御子は、「あなたは、いったい、どういうかたですか」と問われて「わたしは原理である。だからまたあなたがたに語るのである」(ヨハ八・二五)と答えたのである。》同上書, 第一卷第五章, 10.

《というのもかの永遠で不変の、創られたのではなく、生まれた知恵は、霊的で理性的な被造物に対して聖者の魂にたいしてのごとく、自らを伝達し、それによって照らされたこの被造物は、自ら照らすことができるようになるのであるが、その際この被造物のうちに一種の理性的照明状態が生ずる。もしすでに霊的被造物が存在していたとするなら、「光あれ」と神が語られた時

の創られた光とは、この照明状態のことであると解されえよう。》
同上書，第一卷第十七章，32.

2. 感覚的事物の創造。感覚的事物認識の諸段階。感覚的事物存在の
諸段階：－神の言葉における感覚的事物－天使における感覚的事物－
被造世界における感覚的事物

《これに対して {天使および人間} より下位にあるその他のもの
{感覚的事物} は、理性的被造物の認識において先ず生じ、つづ
いてそれ自身の類において生ずるのである。…… (すなわち)
大空の創造には三つの次元がある。まず父より生れた英知の次
元としてはこの {大空の} 創造は神の言葉のうちにあり、つづ
いて霊的被造物のうちに、つまり天使の認識のうちにある。

これは天使のうちにある被造的な英知の次元である。つづいて
大空はその固有の類において、大空という被造物としてあるよ
うに事実に創られたのである。水と地の分離、その独自の形
姿も同様になされ、木々や草々、大空に輝く星辰、水や地から
生れた生きものも、同様な仕方で生じたのである。》『創世記注
解』，第二卷第八章，16.

《というのも動物たちが身体的感覚によってのみ見るような仕方
で、天使は感覚的事物を見るのではないからである。たとえ天
使が何かそうした感覚を用いることがあるとしても、神の言葉
のうちにより良く、内的に認識したものを、むしろ確認するの
である。まず第一に創られた光が天使たちのうちに生ずること
によって彼らが英知的に生きるべく、この神の言葉によって照
らし出されるのである。もっともかの第一の日に霊的被造物が
創られたと理解しての話であるが。このように (イ) 被造物が
創られる理拠が、被造物そのものよりも以前にまず神の言葉の
うちにあるように、(ロ) その理拠の認識は、罪によって暗くさ
れていない英知的被造物のうちに先ず生ずるのであり、(ハ) つ
づいて被造物の創造そのものが生ずるのである。…… (という

のも) 天使たちは創造された時以来、聖にして敬虔なる観照によって、御言葉の永遠性そのものを享受し、その高みから感覚的事物をかえり見、内に見るものに従って、正しくなされたことを承認し、罪を非とするのである。》同上書、第二卷第八章, 17.

《……だから、天使たちのうちにその後創られるべき被造物の認識が生じ、つづいてその固有の類において被造物が生じたという場合、天使たちはこの認識を神御自身から学んだのである。》同上書、第二卷第八章, 18.

《永遠なる光によって形成された理性的被造物と解される光が創造された後、その他の事物が創造された時、「神は『成れ』と言われた」と語られるのをわれわれは聞くのであるが、この場合聖書は、神の言葉の永遠性について言及しようと意図しているとわれわれは解する。これに対して「そのようになった」との聖書の言葉を聞く時、われわれは創られるべき被造物の、神の言葉のうちにある理拠についての認識が、英知的被造物のうちで生じたことと解する。つまりその他の被造物は、この英知的被造物の本性のうちで、或る種の仕方で創造されたのである。すなわちこれら他の被造物が創られるべきであることを、神の言葉そのもののうちでまず一種の予感によって、英知的被造物は認識したのであり、その後、「神は創造された」と繰り返し言われるのを聞く時、われわれはその被造物そのものが、その類に従って生じたことと解する。さらに「神は見て、良しとされた」との言葉を聞く時、創られたものが神の御心にかない、こうして「神の霊が水の面をおおっていた」時に成るのを良しされたものが、その類にしたがって存続するようになったことと解するのである。》同上書、第二卷第八章, 19.

3. 神による感覚的事物の保持

《神は被造物の類を新たに創られることを止め、安息されたとも

解しえよう。というのも以後、新たないかなる類も神は創りたまわなかったが、それから今に至るまで、また今以後も、その時創られたこの同じ類の統治をなしてゆかれると解しうるのである。……創造者の、全能ですべてを保持する権能と力とは、すべての被造物が存続する原因なのである。この力が創られた事物を統治するのをいつか止めるとすれば、同時に事物の形相も止み、すべての自然は崩壊するであろう。》同上書、第四卷第十二章, 22.

4. 天使の感覚的事物認識の諸段階、夕と朝。および感覚的事物の存在の段階

《最初に創られたかの光は物的なものではなく、霊的なものである。そしてそれは闇の後につくられたのであるが、その意味するところは、自らのある種の無形相状態から創造者に身に向け形相づけられたということであるが、それと同じように夕の後に朝となるのである。その意味するところは、霊的被造物が神とは同じでない自らの固有の本性を認識した後で、神ご自身たる光、その観照によって自らが形相づけられた光を賞めたたえるべく、自らをその光に関わらせるということである。そして後に生ずる他の被造物は、この霊的被造物の認識なしには生じないのであるから、創られた事物の類が区別されるごとにこの同じ日が繰り返され、……。だから第一の日の夕とは、自らが神の本性とは同じでないという自己認識のことであり、この夕の後の朝、つまり第一の日が終り第二の日が始まるこの朝は、創られたものを創造者への賛美に関わらせ、そして自らの後に生ずる被造物の認識を神の言葉から得るという、この光のなす創造者への身の向きかえのことである。次の被造物とは大空のことであり、それは、「そのようになった」(一七)と言われた時に、まずこの霊的被造物の認識において生ず

るのであり、つづいて「そのようになった」と言われた後に「神は大空を造り」と付加される時に、それは創られた大空そのものの本性において生ずるのである。次にこの光の夕が生ずる。それはこの霊的被造物が大空そのものを前のように神の言葉においてではなく、その本性そのものにおいて認識する時にである。この認識はより小さいものである故、適切にも夕の名で象徴されるのである。その後、朝になる。これによって第二日が終り第三日が始まるが、この朝において、同じくこの光の身の向き変え、つまり神が大空を創られたことを賞賛し、そして大空の後に創られるべき被造物の認識を神の言葉から得るための光の身の向きかえが生ずるのである。だから神が「天の下の水は一つところに集まれ。乾いたところが表われよ」(一・九)と語れた時、かの光は、この言葉が発せられる神の言葉のうちでこのことを認識する。だから「そのようになった」とつづいて書かれているのである。

これはつまり、神の言葉からの、この被造物による認識において生じているのである。「そのようになった」と言われたのに続いて「そして水が集まり」と付言される時に、被造物そのものがその類に従って生ずるのである。神の言葉において創られるべきであるとすでに認識したかの光によってもう一度、その類に従って実際に神により創られたことが認識される時に、第三の夕が生じ、このようにして第六の日の夕の後の朝に至るまで他のものが同様の経過をたどるのである。》『創世記注解』、第四卷第二十二章, 39.

《確かにのおのの事物についての神の言葉における認識と、その本性における認識との間には大きな差異があり、前者は日に、後者は夕に属するとされるのもっともなことである。というのも神の言葉のうちで洞見されるかの光と比較すると、いかなるものであれ被造物についての、本性そのものにおけるあらゆる認識が夜といわれるのは不適切なことではないからである。し

かしこの本性における認識も、被造物そのものを知らない人々の誤りや無知からは遠くかけ離れており、こうした無知と比較するなら、かの認識は適切にも日といわれるのである。……しかしこの日も、われわれが天使に等しいものとされ、神をそのあるがままに見るようになるという意味でのかの日と比較するなら、それ自身夜にすぎないというのでないなら、われわれはこの世のうちで預言のともし火をもって進みゆく必要もなかったであろう。》同上書、第四卷第二十二章、40.

《われわれのためにキリストが自らなられたその道をわれわれが最後まで踏みしめるなら、復活の後にわれわれもそれに等しくされる聖なる天使たちは常に神の御顔を見ており、父に等しい独り子なる御言葉を享受している。この天使達のうちで、すべてのものに先立って被造的知恵が生じたのであるが、この天使たちは、そのうちに自分たちも第一のものとして創られた被造物の総体を神の言葉そのもののうちにまず認識したのである。それによってすべてのものが創られたものとしてのこの神の言葉のうちに、すべてのものの、時間的に創られた事物さえもの永遠の理拠があるのである。次いで天使たちは、被造物自身においてこの全体を見る。この被造物の知り方はいわば下に見おろすごときものであり、そして被造物を神の賛美へと関わらせるのである。天使たちはこの神の不変の真理のうちに、それに従って被造物が創られた理拠を見ているのであり、それを根源的な仕方で見ているのである。だからかしこにおいては、いわば日のうちに見るごとくであり、こうしてまったく調和した天使たちの統一が同じ真理に参加することによって形成され、日として最初に創られたのである。しかしここ、つまり被造物の本性そのものにおいては、いわば夕のうちに見るごとくである。しかしすぐに朝になる——これは六日間すべてにおいて認められることであるが——、というのは天使的認識は創られたもののうちにとどまらず、むしろこれを直ちに神への賛美と愛へと

関わらせるのである。そしてこの神のうちで、天使たちは、被造物が創られたということではなく、創られるべきであったということを認識するのである。そしてこの真理の真中に立つことにおいて、日が存するのである。》同上書、第四卷第二十四章, 41.

《このように天使たちは、被造物をその創られた事実性において知るのであるが、彼らはすべてのものがそれによって創られた真理において被造物を知ることの方を、被造物の事実性において知ることよりもよりよきものとした。かれらはより良き知を選び、愛したのである。こうして天使たちは真理に与かるものとされたのである。……つまり至高の聖なる天使たちは、被造物をその被造的事実において認識したその認識を、神への賛美と愛へと関わらせるのであり、この神において、それによってすべてが創られた永遠の理拠を観照し、この調和に満ちた観照によって、天使たちは主が創られた唯一の日なのである。教会も、この世の巡行より解放された後この日に連なるのであり、われわれもまたこの日のうちで喜びにあふれ、楽しみに満たされるようになるのである（詩一一八 [一一七] 二四)》同上書、第四卷第二十五章, 42.

《神が創られたかの日は、神の業を通してそれ自身、物的的回転によってではなく霊的な認識によって繰り返されるのである。天使たちのかの至福なる共同体は、「成れ」と神が語りたもう神の言葉のうちでまず第一に観照する。だから「そのようになった」と言われるように、まずこの認識のうちで事物は生成し、その後事物の存在そのものにおいて創られたことが認識されるのである。——このことが夕となったということの意味である。——そして創られた事物のこの認識を、そこで創られるべき理拠が洞見されるかの真理の賛美へと関わらせるのであり、これが朝となったということの意味である。》同上書、第四卷第二十六章, 43.

《彼処においては不変の真理の観照において常に日があり、被造物そのものにおける認識において常に夕があり、この認識から神への賛美に帰ることにおいてつねに朝がある。》同上書、第四卷第三十章、47.

5. 天使からの照明により感覚的事物の真理へと導かれるべき人間的 精神

《私たちは、私たちのよりすぐれた部分である魂において、身体の直立という点でだけ異なる他の動物に似ないようにと、創造者から奨められるのである。私たちは自分の魂を、もっとも高い所にある物体に向けて投げかけてはならない。なぜなら、そのようなものに意志の休息を置くことは、魂を下に向けることにほかならないからである。そうではなく、人間の身体は本性上、物体の中のもっとも高いもの、すなわち天へ向かって立っているように、霊的な実体である精神は霊的なものの中のもっとも高いものへ向かっていなければならない。これはもちろん高慢な思いによってではなく、正義を守る敬虔によってである。》『三位一体』、第十二卷第一章、1.

《……………さらに、これらのものにおいて——私が言うのは霊的なものでなく物的なものであるが——真なるものと真らしいものとがどのように区別されるかを考察すること、これらすべては意識の活動であって、魂が身体の感覚をとおして外の感覚物から引き入れたものにおいて行なわれ営まれるのであるが、そこに理性を欠いていることはなく、したがって人間と動物に共通するものではない。これら物的なものについて、「非物的で永遠的な理性 *rationes sempiternae*」に従って判断することは、いっそう高い理性の務めである。そのような理性は、人間の精神を越えて存在するのでなければ、たしかに普遍的ではない。また、私たちのある部分がこれに結ばれ従うのでなければ、私たちはこれを基準として物的なものについて判断すること

はできない。私たちは、「非物体的で永遠的な理性」に教えられて) 変わることなくとどまると精神が知っている大きさや形にもとづいて物的なものについて判断するのである。》同上書、第十二卷第二章, 2.

《物的かつ時間的な働きをなすとき、動物と異なる仕方で実現する私たちのあの部分は、たしかに理性的なものであるが、それは「私たちを知性的で不変の真理に固着させる精神の理性的実体」によっていわば指導されて、より低いものを扱い管理する務めを委託されているのである。》同上書、第十二卷第三章, 3.

ロ. ディオニュシオス・アレオパギテス『天上位階論』

9世紀に西欧世界に写本が入った。ヒルドウイヌスとヨハネス・スコットゥス・エリウゲナによってラテン語訳が行なわれ、西方にも絶大な権威をもって受容された。(今 義博, ディオニュシオス・アレオパギテス『天上位階論』, 中世思想原典集成3, 平凡社, 1994, 342頁.)

1. 万物の創造の摂理

《「良い贈り物、完全な賜物は皆、上から、もろもろの光の父から降りて来るのである」[ヤコー:一七]。しかし、父が原動力となって光を照射する発出はすべて、善を分与するものとしてわれわれのところにやって来つつ、統一する力としてわれわれを再び元の上の方に戻し、統合者たる父の一性と神的純一性に還帰させるのである。実際、聖なる言葉が述べたように「すべてのものは、神から出て、神に向かっている」[ローマ一:三六]のだからである。》『天上位階論』, 第一章第一節, 120B.

《しかし、何よりも初めに、超存在的な神性の根源が、存在するものの存在のすべてを善から付与することにより、存在することへ引き出したという、あの真実を語らなければならない。というのも、自分自身との交わりへ存在するものと呼び寄せることは万物の原因に、つまり万物を越えている善に特有のことで

あって、その結果、存在するそれぞれのものに対してそれぞれの固有なあり方に応じて存在するものが定められたのだからである。それゆえ、存在するもののすべては、超存在的な、万物の原因である神性から溢れ出る摂理を分有するのである。》同上書、第四章第一節，177C.

2. 天使・知性

《私の考えでは、位階とは、できるだけ神に似たものになるところの、また神から自分に与えられた照明に応じ自分の能力に従って神を模倣すべく上昇するところの聖なる秩序であり、知識であり活動である。》同上書、第三章第一節，164D.

《天上の諸存在である聖なる諸階級は、……………神を模倣しようとして自分自身を〔神性の根源に〕似たものに変形し、神性の根源との類似性をこの世を越えた仕方を見て、自分の知性の姿を形づくろうと努めるのであるが、それは知性の上でのことであるから、当然にも彼らはより豊かに神性との交わりをもち、それに近接していて、神のそれることのない愛が傾注されることにより、許される限り常に高みに昇り、根源からの非物質的で混じりけのない照明を受け、その照明に応じて配列されるのであり、その生命全体が知性なのである。》同上書、第四章第二節，180A.

《それゆえ、位階の目的はできるだけ神に似ることと合一することである。その際に位階は、神をあらゆる聖なる知識と活動の指導者としていて、神のいとも聖なる整然たる美しさのほうを目をそらすことなく注視して自らができる限りそれに似たものとなり、位階に属するもの〔天使〕たちを澄みきった汚れなき鏡たる神の似姿に完成し、光の根源であって神性の根源であるものからの光線を受け入れることができ、与えられた光によって聖なる仕方で満たされるのであるが、それと同時に、神性の根源の定めに従ってその同じ光を〔位階の〕次位のものに惜し

みなく放射するのである。》同上書，第三章第二節，165A.

3. 天使からの照明により神の光に満たされるべき人間知性

《それゆえ、私の思うに、浄化される者は完全に純粋な者に聖化されるのでなければならず、似つかわしくないあらゆる混合から開放されるのでなければならない。また、照明される者は、知性の完全に純粋な目によって歓想の状態と歓想の力へと引き上げられることによって、神の光で満たされるのでなければならない。》同上書，第三章第三節，165D.

《それゆえ、われわれは、……………父から与えられた照明に可能な限り目を向け、その照明の下で(聖書において)象徴的かつ神秘的にわれわれに開示される天上の知性の位階を、できる限り観想しよう。形象で表わされた象徴によって天使の至福なる位階をわれわれに開示する神性の根源たる父からの根源的な、しかもあらゆる根源を超えた光の贈物を、知性の非物質的な揺るぎないまなざしをもってわれわれは受け入れて、それによって逆にその光の贈物からその純一なる輝きへ向かって上昇しよう。……………(その純一な輝きは)自分に向かって力の限り上ってくるものたちをそれらの本性に応じて自分のところに引き寄せ、自分自身の純一化する一性によって一つにまとめるのである。》同上書，第一章第二節，121A.

ハ. 『原因論』

『原因論』は12世紀以降西欧世界に、アリストテレスの著作として受容されていた。(岡崎文明. 新プラトン主義文書『原因論』の形而上学的研究(一). 金沢大学教育学部教科教育研究第28号, 平成4年, 252 - 253頁.)

ささやかな推測ではあるが、グローステストに、アウグスティヌス神学およびディオニュシオス神学とアリストテレス自然学との結合を発想させた要因のひとつが『原因論』であったのかもしれない。なぜな

ら、『原因論』の主題が、つまるところ、「もろもろの感覚的事物の根源的説明」であるとも思われるからである。

1. 『原因論』の主旨

『原因論』が書かれた目的は「消滅と生成のうちにあり、一定の存在をもたない物体世界の存在理由すなわち原因」の解明であると思われる。

その主旨は以下の通りである。

すなわち、第一原因つまり「純粹で真なる一」は、その純粹存在と無限な善性から「自分自身、すなわち存在と普遍性・一性」の惜しみない《注ぎ入れ influere》と《刻印づけ impressio》により、無のなかに万物すなわち知性、および、靈魂、自然、そして「消滅と生成をする物体」を創造した。

2. 『原因論』の概要

まず、純粹存在である第一原因は万物に「存在」を与えて創造した。次に、その存在に無限な善性である「普遍・一性」を刻印づけした。刻印づけされた普遍・一性は、それを受け入れる存在側の能力の許す限りに受け入れられた。その結果、普遍性・一性の相互的類似の連続的階梯というかたちで万物が存在した。その階梯は、i. 知性、ii. 高次の靈魂と、その高次の靈魂が刻印した生成消滅することのない天界、iii. 低次の靈魂と、その低次の靈魂が刻印した生成消滅する物体、から成る。

- i. 第一原因すなわち「純粹で真なる一」に連続し、またそれに依存して存在している知性は、自分を原因した第一原因と、自分が原因する下位者を、自らの存在の仕方によって、すなわち被造的であるが最も高い普遍性・一性という仕方によって認識する。また、高次の靈魂を刻印づけする。
- ii. 知性に連続し、またそれに依存して存在している高次の靈魂は、自分を原因した知性と自分が原因する下位者を、自らの存在の

仕方によって、すなわちより低次の普遍性と一性という仕方によって認識する。また、低次の靈魂と、天界（アリストテレスの月上界）を刻印づけする。

- iii. 高次の靈魂に連続し、またそれに依存して存在している低次の靈魂にはきわめて弱い普遍性と一性しかない。これは存在と認識と一性をもたないところの、消滅と生成の物体世界（アリストテレスの月下界）を刻印づけする。それでも低次の靈魂の影響でこの世界には「なんらかの普遍性・一性と持続性」が保たれている。

以上の理由で、この生成消滅する物体世界は、知性「普遍・一性」の支配と保持を直接受けることはない。しかしこの生成消滅する物体世界は第一原因の創造の力によって存在しているものであり、また第一原因と第二原因からのすべての刻印の最終結果でもある。それゆえ、生成消滅する物体世界も、「すべてのものに自らの善性を限りなく与える第一原因の支配」を免れない。したがって、物体世界には、「消滅した同じものは必ずまた生成する」など、なんらかの普遍性・一性と持続性が保たれている。

3. 関連するテキストの抜粋

《 》中の冒頭の番号は Pattin 校本による。

また訳文中の { } 内の字句の翻訳は訳者による。

i. 第一原因について

《40. そして、存在がかくの如きものとして生ぜしめられているのは、如何なる意味における多数性もそのうちには存しないごとき「純粹にして一にして真なる存在」への近接によってでしかない。》

《57. 第一原因はすべての言表を超えたものである。そして、諸々の言語が第一原因の言表を欠いているのは、それが第一原因の存在の言表だからにほかならず、それというのも、第一原因はすべての原因の上にあり、第一原因の光によって照らされてい

る諸々の第二原因によってでなければ言表されないのだからである。》

《58. というのは、すなわち、第一原因は自己が原因したものを照らすのを止めることはないのであるが、第一原因自身は、他の如何なる光によっても照らされないのである。けだし、第一原因は純粋な光であって、その上には光がないのだから。》

《59. こうしたことから、だから、第一原因のみはその言表を欠いているという事態が生じているのであって、事態がそうであるのは、第一原因の上に、それによって第一原因が認識されるごとき原因が存在しないのだからにほかならない。》

《60. けだし、まことに、すべて事物が認識され、また、言表されるのは、その事物の原因そのものによってでしかない。だから、事物がただ原因のみであって原因されたものでない場合には、第一の原因によって知られることがなく、また、それは言表を超えたものであり、言葉がそれに伴わないのであるから、言表されることもないのである。》

《63. そして、実に、第一原因が表示されるのは、第二原因、即ち、知性者によってでしかないものであり、また、自己によって第一に原因されたものの名前によって名づけられるにしても、それはより高き、より優れた仕方によってのみ可能なのである。なぜなら、原因されたものに属するものは、やはり、原因にも属するのではあるが、しかし、それは、より崇高な、より優れた、より高貴な仕方によってそうなのであるということ、我々がすでに示したごとくだからである。》

ii. 万物の創造者である第一原因について

《91. もし、誰かが、第一原因にも「ユリアティム（普遍的性格というべきもの）」がなくてはならぬ、というとするならば、我々は答えて、第一原因の「ユリアティム（普遍的性格というべきもの）」とは無限性に他ならず、そして、その「個性性」が純粋

なる善性なのであって、これがあらゆる善性を知性者の上へ {流入せしめ influere}、また、知性者を媒介として、残りの諸事物の上へ {流入せしめる influere} と、いうべきであろう。》

《87. そして、第一原因は、実に知性者でも、魂でも自然でもなくして、むしろ [知性者] や靈魂や自然の上にあるのである。けだし、第一原因はあらゆる事物の創造者なのだから。ただし第一原因は、知性者を、媒介するものなしに創造するのだが、魂や自然や爾余の諸事物は、知性を媒介として創造する。》

iii. 知性者どもについて

《92. すべて知性者は諸々の形相で充ちている。ただし、諸知性者のうち、或る知性者達はより低い段階の普遍的諸形相を内含し、或る知性者達はより高い段階の普遍的諸形相を内含している。》

《93. というのはこういうわけである。すなわち、下位の第二の諸知性者のうちに個別的な仕方によって存在するところの諸形相は、第一の諸知性者のうちには普遍的な仕方によって存するのであり、また、第一の諸知性者のうちに普遍的な仕方によって存するところの諸形相は、第二の諸知性者のうちには個別的な仕方では存するのである。》

《94. また、第一の諸知性者のうちには大いなるちからが在する。第一の諸知性者は下位の第二の諸知性者よりもより強力な一性を特質として有つものなのだから。そして、下位の第二の諸知性者のうちには弱きちからが存する。それは、第二の諸知性者はより小なる一性とより大なる多性とを特質として有するものだからである。》

《95. そのわけはこうである。「純粹なる真である一」に近くある知性者はより小なる量とより大なるちからとを特質として有つものであり、「純粹なる真である一」から一層遠くある知性者はより多き量とより弱きちからとを特質として有つものである。》

《96. そしてまた、「純粹なる [真である一]」に近い諸知性者はより小なる量とより大なるちからとを特質とするのだからして、ここから、第一の諸知性者から発出するところの諸形相は単一化された普遍的な発出でもって発出する、という事態が生ずるのである。》

《98. こうしたことのために次の如き事態が生ずる。すなわち、第二の諸知性者は自己の視線を、(第一の) 普遍的な諸知性者のうちにある普遍的な形相に向けて投じ、その形相を分割し分離せしめる。なぜならば、第二の諸知性者はそれら(第一の) 普遍的な形相を、それらのもつ真理性と確實性とに則して受け取ることとはできず、第二の諸知性者が受け取ることのできる仕方によって [すなわち、分離と分割とによって、]、でしか受け取ることができないからである。》

iv. 第二原因である知性の物体世界認識の仕方について

《69. ……知性者が物体的事物を知ろうと欲するとき、知性者は、物体的事物と共に延長を有つのではなく、かえって、それ自体は自己の態勢に即して一定しているものとして定存するのである。》

《72. すべて知性者は、自己の上位にあるところのものと、自己の下位にあるところのものを知る。しかしながら、自己の下位にあるところのものを知るのは、そのものにとっての原因たるがゆえにであり、自己の上位にあるところのものを知るのは、そのものからもろもろの善性を取得するのだからである。》

《76. ……第一原因から知性者へと降下したもろもろの善性は、知性者においては知性的なものとしてあり、また同様に、可感的物体的な諸事物も知性者においては知性的なものとしてある。》

Ⅴ. 物体の尊厳について

物体の尊厳 (1)

物体世界の存在と形相は、第一原因に創造された第二原因すなわち「知性と靈魂」の奉仕を伴って、根源的かつ全体的に第一原因の力によって造られた。

《1. すべて第一次的原因は、自己によって原因されたものに、第二の普遍的原因よりもより多く {ちからを及ぼす *influeret*} ものである。》

《2. ゆえに、第二の普遍的原因が自己のちからを事物から除去しても、第一の普遍的原因はそのちからを事物から取り去らない。》

《3. こうしたことの理由は、第一の普遍的原因は、第二原因によって原因されたものに対して、第一の普遍的原因に後続する第二の普遍的原因がはたらくよりも前にはたらくのだからである。》

《4. ゆえに、後続する第二原因が原因されたものにはたらく場合、その第二原因の活動は、自己の上位にある第一原因は無しで済むといったものではない。》

《5. そして第二原因が、第二原因に後続する原因されたものから分離する時にも、第二原因にとっての原因であるがゆえに第二原因の上位にあるところの第一原因は、そのものから分離することはないのである。》

《12. すでにして、だから、遠い第一原因が近い原因よりもより包括的な、かつ、より強力な「事物の原因」であることは明白かつ判明である。》

《13. そして、第一原因のはたらきが近い原因のはたらきよりもより強力に事物に固着するということの生ずる所以もこの点に存するのであって、まことに、こうしたことが生ずるのは、事物が最初にはたらきを受けるのは、遠いちからによってでしかなく、然る後に、二番目に、第一のちからの下に属するちからからはたらきを受けるのだからに他ならないのである。》

《14. そして、第一原因は、第二原因をそのはたらきの上で助け

るのである。けだし、第二原因が生ぜしめるすべてののはたらきは、第一原因もまたこれを生ぜしめているのである。ただし、第一原因は、第二原因とは別の、より高いより崇高な仕方で生ぜしめているのではあるが。》

《17. ……第二原因が事物を生ぜしめるときには、第二原因の上位にある第一原因が、その事物の上に自己のちからを {流入せしめている *influere*} のであり、こうして、第一原因は、強力な固着でもってその事物に固着し、それを維持しているのである。》

物体の尊厳 (2)

《43. 被造の存在のうちの第一原因に後続するところのものはすべて「アキリ」(*achili* = 知性. A.M.GOICHON, *Lexique de la langue philosophique d'Ibn Sina*, Paris, 1938, p.226, nr. 439.) である。すなわち、能力並びにのこりの諸々の善性において、完全にして究極的な知性である。》

《44. そして、そのもののうちにある諸々の知性的形相は、より広くより強度に普遍的である。また、被造の存在のうちのより下位にあるところのものは、やはり、知性者であるが、しかしながら、完全性やちからや諸善性において、前者の知性者の下に属するのである。》

《49. 第一原因に後続するところの上位のもろもろの第一知性者は、定存するもろもろの第二形相を {刻印づけする *imprimere*}。…もろもろの第二知性は、魂がそうであるとき、衰微し可分離的なもろもろの形相を {刻印づけする *imprimere*}。》

《50. すなわち、魂は、被造の存在の下に続く第二知性者の {刻印づけ *impressio*} から生ずるのである。》

《54. そして、すべて、知性者からより多くのちからを受け取る魂は、{刻印づけ *impressio* する} 上でより力強く、また、それ

によって {刻印づけされたところのもの impressum (アリストテレスの月上界)} は一定不変であり定存するものであり、また、そのものの運動は均等的かつ連続的である。そして、魂のうちで、そのうちにある知性のちからがより少ないところの魂は、{刻印づけすること impressio} において第一の諸々の魂の下にあり、また、その魂によって {刻印づけされたところのもの impressum (アリストテレスの月下界)} は弱く、消えゆくものであり、可滅的である。》

《55. しかしながら、それは、そのような事情にあるけれども、他面、生殖 generatio ということによって永続するのである。》

物体の尊厳 (3)

《174. ただし、知性者は自分の下位にある諸事物を支配するのではあるが、しかし、祝福された崇高なるもの、神は、支配の点で知性者を凌駕しているのであって知性者の支配があるよりもより崇高にしてより高い秩序に属する支配でもって諸事物を支配するのである。というのも、神は、知性者に支配を与えるところのものに他ならないのであるから。》

《175. このことの証拠は次の点にある。すなわち、知性者の支配を受け入れないごとき諸事物（消滅と生成のうちにある物体世界）も、「知性者の創造者」の支配は受け入れるのである。なぜなら、神は、あらゆる事物をして、[同時に] 自分の善性を受け取らしめんことを欲するがゆえに、いかなる事物といえども彼の支配を逃れることは決してありえないのだからである。

そのわけは、「すべてのものがいずれも知性者を希求し、また、知性者を受け入れることを希求する」ということはないのだが、しかも、あらゆるものは、第一のものからの善性を希求し、それも、大いなる希求でもってそれを受け入れることを希求するのだからである。そして、この点に関しては、疑いを抱く者はひとりもないのである。》

物体の尊厳 (4)

《204. もろもろの被造物は相互に接続しているものであり、かつ上位の実体に接続するのはそれに類似した実体でしかなくて、類似していない実体は接続しない……。だからして、「時間のうちにおいて恒常的な諸実体」が、「恒常的な諸実体」に接続するところのものであり、かつ、「一定不変なる諸実体」と「時間において切られた諸実体」との間の中間者なのである。また、「時間より上位にあるところの諸実体」が「時間のうちにおいて創造された時間的な諸実体」と接続することは、「時間のうちにおいて恒常的な時間的な諸実体」が中間者となることによってでなくては不可能である。》

《206……だからして、時間の上位にある恒常的な諸実体に触れ、かつ時間において切断された諸実体にも触れるであろうごとき諸実体が、必然的に存在しなくてはならないのである。》

《207. かくして、かかるもろもろの実体は、その運動によって、時間において切断されたもろもろの実体と時間より上位にある恒常的なもろもろの実体との間を結び、また、その持続可能性によって、時間より上位にあるもろもろの実体と時間の下に属しているもろもろの実体、すなわち、生成と消滅の下にお納まるもろもろの実体との間を結ぶであろう。そしてまた、それは、善なるもろもろの実体と価値低きもろもろの実体との間を結び、かくして、価値低きもろもろの実体が善なるもろもろの実体たることから見離されていかなる善をもいかなる調和をも失い、かかるもろもろの実体には持続ということも一定ということも存在しないといったことはなくなるであろう。》

《209. すでにして、だから、もろもろの実体のうち、或るものは時間より上位にあつて恒常的なもの（知性者ども）であり、また、その或るものは、時間と均等の恒常的なもの（月上界すなわち天界）であつて、しかも、時間がそれを超え出ていないごときものであり、また、或るものは、時間によって区切られており、

時間はそれを、その上方にもその下方にも超え出る、[すなわち、その始めから終りまでよりもさらに超え出ているのである。] そして、それは、生成と消滅の下に納まる実体ども（月下界にある実体ども）にはかならないのである。》

物体の尊厳 (5)

《81. ……知性者は、自己のうちに存する神的なちからによって自己の下位にあるところのあらゆる事物を支配し、また、そのちからによってもろもろの事物を保持する。なんとなれば、知性者はそのちからによってもろもろの事物の原因たるのだから。そして、知性者は、自己の下位にあるあらゆる事物を保持し、それらを包蔵している。》

《82. というのはこういうわけである。およそ諸事物にとって第一のものであり、かつ、それらにとっての原因たるものはすべて、それら諸事物を保持し、それらを支配するものであって、その高きちからのゆえに、それらもろもろの事物のうちのどれかがそれから離脱するといったことはないのである。だから、知性者は、自己の下位にあるところのあらゆる事物の統領であり、それらを保持しそれらを支配する。それはちょうど、自然が知性者のちからによって自己の下にあるもろもろの事物を支配するのと同じである。そしてまた同様に、知性者は神のちからによって自然を支配するのである。》

《85. 自然は生成を包含し、魂は自然を包含し、そして、知性者は魂を包含する。》

《86. だから、知性者はあらゆる事物を包含する。そして、知性者がこのようにつくられているのは、あらゆる事物を超え出ているところの第一原因のゆえなるに他ならぬ。なぜなら、第一原因は、知性者と、魂と、自然と、残りのもろもろの事物との原因なのだから。》

(4) 224 行《第一の光》

本章の主題は、《外的な光》と、人間の《外的諸感覚》と、アリストテレスの「帰納」と《実験》を神学的に評価し、「第一の光の放射に始まる創造の神学」の中に組み入れることにある。

以下に本章の《光》概念の諸相を整理する。

1. 神的精神から知性実体に放射される《第一の光》。
知性実体がその中で「神的精神が知るすべての個別的被造物」を見るところの《第一の光》。224 行－225 行
2. 人間的靈魂の最高位の「知性的部分」がその中で感覚の補助なしに「知性実体が知るすべての個別的被造物」を見るはずであった《より上位の光から受け取る放射》。228 行－234 行
これは《太陽が外的な目に関わる仕方と同様に靈魂の視力に関わる光》283 行であり、また、本来ならば《人間に固有》でありまた《人間に生まれつき》の《光》285 行である。
3. 人間の《精神の視力》がその中で或る仕方で外的諸感覚を介して《自分に生まれつきの光の跡》を見いだす努力をすべきその《外的可感的光》。286 行－288 行

(5) 217 行－225 行 神的精神と知性実体がもつ《すべての個別的なモノども》についての《本質の純粹性における》《普遍的知識》

1. 『分析論後書注解』第一卷第七章 99 行－103 行には、i. 存在と認識の根源が《普遍》であること、ii. その存在と認識の第一の根源である第一の普遍は第一原因であること、がより明確に述べられている。

《この疑問に対しては、以下のように述べられねばならない。普遍的なものどもは認識の諸根源である。そして、「純粹であり、表象どもから分離されており、〈第一原因であるところの第一の光〉を觀照しうる知性」のもとには、「創造されない仕方で永遠から第一原因の中に存在している〈モノどもの諸根拠〉を認識するための諸根源」が存在している。その理由。第一原因の中

に永遠的に存在していた「創造されるべきモノどもの諸認識は、創造されるべきモノどもの諸根拠であり、形相的範型的諸原因であり、それら自体は諸創造原因でもある。これらこそ、プラトンが〈もろもろのイデア〉ないし〈原型的世界〉と呼んだものでもあり、これらこそが、彼にしたがえば、類どもと種どもでもあり、諸根源であると同様に認識の諸根源でもある。

Ad hoc dicendum quod universalia sunt principia cognoscendi et apud intellectum purum et separatum a phantasmatibus, possibilem contemplari lucem primam, que est causa prima, sunt principia cognoscendi rationes rerum increate ab eterno existentes in causa prima. Cognitiones enim rerum creandarum que fuerunt in causa prima eternaliter sunt rationes rerum creandarum et cause formales exemplares, et ipse sunt etiam creatrices. Et he sunt quas vocavit Plato ydeas et mundum archetypum, et he sunt secundum ipsum genera et species et principia tam essendi quam cognoscendi,》

2. 『原因論』は、

- i. 普遍、一性、善性、認識、存在が同じものであること
- ii. 創造とは「無限に完全な普遍、一性、善性、認識、存在」である第一原因が、他者へ惜しみなく自己のすべてを注入することであること
- iii. 「知性、靈魂、自然」はそれぞれが、「与えられた無限に完全な普遍、一性、善性、認識、存在」の、自分に可能な限りの最高の受け入れであること

を明確に述べている。

なお、テキストは、覚え書き (3) ハを参照。

(6) 235 行－ 253 行

この個所においてグローステストは、アリストテレスの認識理論「人間の認識は感覚から始まる」（覚え書き（2）を参照。『分析論後書』第二卷第十九章 99b30－100a15）を原罪により墮落した人間の認識能力にあてはまる説明として受け入れる。

さらにグローステストは、アリストテレスの「多数の感覚経験から始まる一連の手続きによる、無中項なる普遍原理発見をめざす探究」を「可感的事物についての天使的で《十全的知識》への上昇の始まり」と理解する。

アリストテレスの関連テキストを以下に挙げる。

《或る一つの感覚が失われるならば、或る一つの知識も失われざるをえないということもまた明白である。というのは、われわれが事物を学び知るのは帰納によるか、論証によるかである。……感覚をもたなければ、ひとは帰納によって「全体的なものに」導かれることは不可能であるとすれば（何となれば、個々のものを知るものは感覚であるから）、[失われた感覚に応ずる] この知識をわれわれは得ることをえないからである。すなわち、[感覚がなければ] これら個々のものについての「科学的な」知識を得ることはできない。何となれば、帰納することなしには、全体的なものから出発してそれらについての「科学的な」知識を得ることができないし、また、感覚することなしには、これを帰納を通じて得ることもできないからである。》『分析論後書』第一卷第十八章 81a40－b9

《ソフィストのような付帯的な仕方においてではなく、限定ぬきの意味においてそれぞれの事物の、知識をもっているとわれわれが思うのは、[1] 当の事物がそれによってある原因を、その当の事物の原因であると知り、[2] またその事物が「いまあるところと異なつて」他ではありえないと知っていると思う時である。……「事物の知識をもつこと」がいまわれわれが定めた

ような事柄〔原因による、必然なる事態の把握〕であるとすれば、
 論証的な知識が〔イ〕真の、〔ロ〕第一の、無中項の、〔ハ〕結
 論よりもいっそうよく知られえ、結論よりも先であり、結論の
 原因である原理から出発して得られるものであることもまた必
 然である。何となれば、論証の原理がこのようなものである時に、
 原理は証明されるもの〔結論〕にとって本具の原理となろうか
 らである。……なるほど推論はこれらの原理を欠いても成立
 するであろう、しかし、論証は成立しないであろう。なぜなら、
 それは事物の知識を生むことがなからうからである。〔イ〕原理
 は真にあるものでなければならない。……〔ロ〕また論証は第
 一の、論証されえない原理から出発しなければならない。……
 〔ハ〕原理はまた結論の原因であり、結論よりもいっそうよく
 知られうるものであり、また結論よりも先のものでなければな
 らない。それが原因であるのは、われわれが事物の原因を知る
 とき事物の知識をもつからであり、原因であるならば、それは
 結論よりも先のものでもある。》『分析論後書』第一卷第二章
 71b10 - 32.

《ついで、〔論証の〕（無中項の、第一）原理についてそれらがど
 のようにしてわれわれに知られうるものとなり、それらを認識
 する能力が何であるかが、まず、これらをめぐる難問をあらか
 じめ究明しておくことにより、明らかとなろう。……われわれ
 の内に……われわれは必然に或る種の〔潜在〕能力をもってい
 なければならない。……感覚からは記憶が生じ、同じものにつ
 いて、繰り返して得られた記憶から経験が生ずる。すなわち、
 数において多くの記憶が一つの経験であるからである。経験か
 ら、あるいは別の言い方をすれば、〔経験に含まれる〕すべての
 事例から、〔これらの〕全体についてあること〔普遍〕が魂の内
 で静止するに至る時、すなわち、それらのすべての事例の内に
 同じひとつのものが含まれている時、それが魂の内において多
 から離れ、一として静止する時に、〔人間における〕技術と知識

の端初がある。……それら（技術と知識の端初）は感覚からわれわれに生じてくるのである。…… [互いに形相における] 差別をもたないもの [個別] の内の一つが止まる時、魂の内に最初の「全体的なもの」が生ずる（何となれば、ひとが感覚するもの [感覚対象] は個々のものであるが、感覚 [内容] は全体的なものについてだからである。すなわち、感覚 [内容] は人間についてであって、人間である [個々の] カルリヤスについてではないからである）。ついで、これらの [最初の全体的な] ものの内に [いっそう全体的なものの] 停止が起こり、遂に、無部分なもの、すなわち、[最も] 全体的なものが止まるに至る。たとえば、これこれの種類の動物が [ひとつの全体的なものとして] 止まって、動物の停止に至り、また、これについても同じことが起こるというように。このようにして、第一のもの [原理] を知るために、われわれが帰納にたよらざるをえないことは明白である。実際、感覚が「全体的なもの」を魂の内に作り出す際にも、それはこのような仕方によるからである。……

[論証による] 知識と理性の洞観はいつも真なるものであり、理性の洞観を除いては [論証による] 知識よりもいっそう明確な種類の能力は他にない、さらに、[論証の] 原理は論証 [の結論] よりもいっそうよく知られうるものであり、また、すべての [論証による] 知識は論拠をもって [論証] するものである。……もしも、[論証による] 知識を除いては、[理性の洞観の他に] われわれにはいかなる他の種類の能力も [いつも] 真なる能力としてはないとするならば、{帰納における (筆者)} 理性の洞観が [論証による] 知識の端初であることになる。》『分析論後書』第二卷第十九章 99b19 – 100b15

(7) 254 行 – 271 行

1. この個所において、グローステストは以下の通りに考察を進める。

- i. 同じ二つの可視的モノどもの頻繁な連続を目で経験すること。
- ii. 目に見えるこの連続を説明する目に見えない普遍的因果関係の存在が高い可能性をもって推測されること。
- iii. 理性が「この推測の真偽の検証の必要性」にめざめること。
- iv. 目に見えるかたちで真偽が明らかになるようにと理性が考案した人工的条件下で同じ連続が再現されること。
- v. この連続には目に見えない普遍的必然的根拠（理由）があることを、目に見えるかたちで理性が知ること。

すなわち、いちどなされた「帰納法」作業は、のちになされる「実験」の補助により初めて「事象の不可視的普遍的根拠」へわれわれを導くことになる。

2. 『分析論後書』第二卷第十九章では、アリストテレスが「帰納」を素朴に信頼し、「実験」の必要性に思いをいたしていないかに一見思われる。すなわちそこでは、

- i. 論証の原理である普遍は、「繰り返し得られた感覚的経験」に基づく「帰納」により得られる。
- ii. 「繰り返し得られた感覚的経験」に随伴する理性の洞察はいつも真なるものである。この洞察から論証による知識が始まる。

と言われている。すなわち、「帰納」において同時にはたらく理性は、「繰り返し得られた感覚的経験」の内に同じ一つのものを見いだし、それが「これらの全体について存在すること、すなわち普遍である」と洞察し、そして理性によるその洞察が真理であるとする。

たしかに、ここにはグローステストのいう「実験の補助」の考えはない。しかし、『動物発生論』においてアリストテレスは、同一種類のすべての個体についての「繰り返し得られる感覚的経験」自体があらかじめ正確な観察と考察によって検証されることを求めている（『動物発生論』第3巻第6章 756b₁₀ – 757a. アストテレス全集9. 岩波書店. 島崎三郎訳. 1969年）。加えて『動物発生論』が、当時としては詳細な事例観察記録をもとにおびただしい種類の発生事例について、そこに普遍的類型を整理し指摘している点に注目したい。

以上の理由で、訳者は次のような推測を立ててみた。

たがいに異なる時代と歴史のなかに置かれて、グローステストは「実験」の必要性を、アリストテレスは「事例観察の正確さ」の必要性を自覚した。しかしアリストテレスの「事例観察の正確さ」を得るためのさまざまな工夫には、のちに「実験」と言われることになる要素がすべて含まれていたにちがいない。

(8) 256 行. 《スカモネア scammonia》

スカモネアの薬効についての報告を、グローステストが目にした可能性がきわめて高い次の三著、1. 小プリニウス著『博物誌』*NATURALIS HISTORIA* と、2. アヴィケンナ著・クレモナのジェラルドによるラテン語訳『医学典範』第二巻 *LIBER CANONIS MEDICINAE* Lib. 2.、および、3. ガレノス著『全著作集』から、引用する。

1. 小プリニウス『博物誌』

《スカモニウムもまた、胃を緩下することによって胆汁を抜き取る。そのほかに、もしスカモニウムの2オボルスに2ドラクマのアロエが付加されるならば、腹を緩下する。(胆汁過多による病気の治療)

Scamonium quoque dissolutione stomachi bilem detrahit, alvom solvit, praeterquam si adiciantur aloes drachmae duae obolis eius duobus.》C. Plinii Secundi *Naturalis Historia*, recensuit D. Detlefsen, Georg Olms Verlag, Hildesheim・Zurich・NewYork, 1992. XXVI. 8. (38), p.118

2. アヴィケンナ『医学典範』第二巻

イ. 《スカモネアは何であるか。或る「巻きつき植物」(学術用語集. 植物学編. 文部省. 丸善. 601 頁) の液汁であり、その効力は三十年間持続する。

Scamonea quid est. Succus volubilis cuiusdam, cuius virtus

usque ad xxx perdurat annos.》*AVICENNE LIBER CANONIS MEDICINE* (translatus a Gerardo de Cremona) cum castigationibus Andree Bellunensis, 1526. Liber Secundus, Caput 635, 1 行目.

- ロ. 《スカモネアは緩下作用によってコレラを強力に引き出す。しかし、スカモネアは諸地域において異なっていて、私が数冊の医学書の中で数ポンド等のスカモネアの用量を見たほどである。

また、スカモネアは腸管に害を与えるし、流産のためにも供される。また、スカモネアの本の根から1ポンドの金色液汁が飲まれるときは、それはシトロン色のコレラと粘液を緩下する。

Solutione educit choleram fortiter. Ipsa vero in regionibus diversificatur adeo, quod ego vidi in quibusdam libris medicorum dosim eius plurimi ponderis, et ipsa nocet intestinis, et supponitur ad abortum, et cum ex radice arboris eius bibitur pondus aurei, solvit choleram citrinam et phlegma.》同上書, Liber Secundus, Caput 635, 29 行目～34 行目.

3. ガレノス『全著作集』(Claudii Galeni *OPERA OMNIA I-XX*, Georg Olms Hildesheim 1964-1965, Reprografischer Nachdruck der Ausgabe, Leipzig 1821.) 中の以下の医療関連小著。

- イ. 《春の季節、雌山羊たちがスカモニアの芽を食いつくしたとき、その芽たちは浄化の乳を産み出す。だがもしトウダイグサを雌山羊たちが食べても同じことが起こる。

Verno tempore, quando caprae scammoniae germina depastae fuerunt, purgatorium ipsa leac generant, quod si tithymalo vescantur, idem accidit.》*Hippocratis epidemii VI. et Galeni in illum commentarius V. sectio V. XVII*, B. 306.

- ロ. 《スカモニアは、薬用液汁の害に対抗する。

succi [noxae] [adversantur] scammoniae.》 *Galeno ascripta introductio seu medicus*. XIV. 761.

ハ. 《スカモニウムは黄胆汁を引き出すと思われる。

scammonium bilem flavam trahere apparet.》 *Galenī ad Pisonem de theriaca liber*, XIV, 223.

ニ. 《すべての人たちは、スカモニウムも、また、下腹部を浄化する能力をもっていると言っている。

omnes et scammonium alvi purgandae facultatem obtinere dicunt.》 *Galenī de substantia facultatum naturalium fragmentum*, IV, 760.

ホ. 《以前しばしば、腸の激痛に苦しんだ人が、スカモニアの液汁を飲んで浄化された。

qui saepe ante colicis cruciatibus fuerat affectus, accepto scammoniae succo fuit purgatus.》 *Galenī methodi medendi Liber XII*, X, 858.

(9) 272 行－278 行

アリストテレス『分析論後書』の関連箇所を引用する。

《或る一つの感覚が失われるならば、或る一つの知識も失わざるをえないということもまた明白である。というのは、われわれが事物を学び知るのは帰納によるか、論証によるかであり、また、論証は全体的なもの〔普遍〕から出発し、帰納は部分的なもの〔特殊〕から出発するものであるとすれば、また全体的なものを見ることは帰納を通ずることなしには不可能であるとすれば(というのは、「抽象による」といわれるものについても、ひとはこれを帰納を通じて、知られうるものとするであろうから、なぜなら、それらの〔抽象的な〕もののなかの或るものは、〔それ自体として〕離存するものではないとしても、それぞれの〔感覚される〕類がその〔当の抽象的なものの〕ようなものである限りにおいて、その類〔に属する事物〕についてそれはあること

であるからである)、しかるに、感覚をもたなければ、ひとは帰納によって[全体的なものに]導かれることは不可能であるとすれば(何となれば、個々のものを知るものは感覚であるから)、[失われた感覚に應ずる]この知識をわれわれは得ることをえないからである。すなわち、[感覚がなければ]これら個々のものについての[科学的な]知識を得ることはできない。何となれば、帰納することなしには、全体的なものから出発してそれらについての[科学的な]知識を得ることができないし、また、感覚することなしには、これを帰納を通じて得ることもできないからである。》『分析論後書』第一卷第十八章 81a40 - b9

(10) 279 行 - 283 行

アウグスティヌスから以下の記述を挙げる。

《私たちはある物体を見て、次の三つのことをきわめて容易に認め、識別することができる。第一は、私たちが見ているもの自体で、……ある。中略。次に、感覚の前におかれていても、私たちが知覚する前には存在していなかった視像である。第三は、見られている間、見られるものへ目の感覚を向ける精神の志向である。》『三位一体』第十一卷第二章二

《内なる人に知解が与えられているように、外なる人に身体感覚が与えられている……。そこで、私たちはできるならば、この外なる人の中にも三位一体の跡を追うに努めたい。中略。外なる人は内なる人と同じように神の似像であるのではない。内なる人は「彼を造った方の似像にしたがって、神の認識において新たにされる」(コロ三・十)のである。使徒は他の箇所でも言っている。「私たちの外なる人は滅んでも、内なる人は日々に新しくされる」(Ⅱコリ四・十六)。……私たちは創造の秩序に従い、可死的で肉的なものとして造られているので、知性的なものよりも可視的なものにいっそう容易に、いわばいっそう親密に結ばれている。後者は外的、前者は内的で、私たちは後者

を感覚でもって受け取り、前者を精神によって知解する。しかし、私たち自身は魂であって、これは感覚的なものすなわち物体ではなく、知性的なものである。私たちは生命だからである。ところが、今言ったように、私たちは物的なものに強く慣れ親しんでいるために、私たちの関心は考えられないほど執拗に物体の中へと滑り落ち、自分を外に投げ出すのである。そのため、確実に堅固な認識をもって霊に固着しようとして物体の不確実な領域から引き離されても、ふたたび物体のほうに戻って、自分の弱さを捕らえた場所に休みを得ようとするのである。》同上書、第十一卷第一章一

《意志は、愛とか欲求とか欲望とよばれるほどに強いとき、生きているものの身体の他の部分にも大きく作用する。そして身体の質料が鈍くて生気がなく、抵抗しない場合、意志は自分が見ているのと同じ形や色を変えることさえする。》同上書、第十一卷第二章五

《このようなわけで、外なる人の三一性に従って生きる者は悪しく醜く生きるのである。この三一性も内的に写し出されたもの（記憶）に関わっているが、それはやはり外的なものの写しであり、感性的・身体的な事物を用いるために生まれたものだからである。もし知覚されたものの似像が記憶のなかに保持されなければ、人はそれをよく用いることはできないだろう。そして、意志のもっとも高貴な部分がより高くより内的なものの間に住んでいるのでなければ、さらにまた、外にある物体なり内にある物体の似像なりに適合される意志が、それらのものにおいてとらえるものをいっそうよく一層真実な生活に向け、それに目を注ぐとき、外的な行動はいかになされるべきかを判断してその目標に憩うのでないならば、使徒が「この世にならってはいけない。」（ローマ二・二）と言って禁止したこと以外の何を私たちはなすであろうか。

それゆえ、この三一性は神の似像ではない。この三一性は最下

級のものすなわち物的な被造物にもとづいて、身体の感覚をとおして魂のなかに生じたのである。》同上書、第十一卷第五章八

(11) 284 行－290 行

ディオニュシオスは『天上位階論』において、教会聖職者位階制度は天上位階の可感的似像であり、それは感覚経験を介して人間の靈魂を天上位階の觀照へと導くと述べる。

《それゆえ、聖化の根源は、われわれのいとも聖なる位階を設立するのに、天上の位階をこの世を超えた仕方で模倣するのがよいと考え、今述べたこの非物質的な（天上の）位階をもろもろの物質的な姿や形を組み合わせる多彩に飾り立て、われわれの位階を作り与えたのである。それ〔聖化の根源〕がそうしたのは、……われわれの知性は自分に適した物質的な導きを享けるのでなければ、天上の位階のあの非物質的な模倣と觀想に昇っていくということができないからである。われわれの知性は〔現實に〕現われている美しさを隠れている整然たる美しさの写しと捉え、また感覚で捉えることのできる芳香を知性で捉えることのできる発散の象徴と捉え、また物質的な光を非物質的な光の賜物の似姿と捉え、また聖なる悟性的思考の訓練を知性による觀想の充満と捉え、またこの世のもろもろの配列の秩序を神に属する事柄にふさわしい調和のある整えられた状態と捉え〔中略〕たりするのであるがそれはわれわれを、感覚で捉えることのできるものを通して知性で捉えることのできるものにまで、聖なるものを表わす象徴を元にして天上の位階の純一なる頂きまで引き上げるためである。》第一章第三節 121C. 完